優秀修士論文概要

中近世移行期における

宗教的都鄙関係変遷の検討

—— 顕密寺院を事例に ——

篠原 佑典

序 章

中世仏教史研究の大きな画期は、黒田俊雄氏による顕密体制論の提唱である。氏の研究は、顕密仏教研究を飛躍的に前進させたが、中世前期を中心に構築されたため、中世後期の顕密仏教を宗教一揆による衰退期として描いた。その結果、新仏教や禅宗研究に比べて中世後期の顕密仏教研究は停滞した。その後、顕密体制論の見直しとともに、寺院の内部構造や経済活動などが明らかにされたものの、地域が極めて限定された中での検討が多く、近世との断絶が強調され、中世仏教から近世仏教へ架橋する視座が弱いという課題を見出した。

そこで本論文では、中世に限らず近世初期までを検討時期に含め、複眼的な視点から議論するために都鄙関係を題材とし、中近世移行期における宗教的都鄙関係の変遷を追うことを修士論文の課題に設定した。また、顕密寺院の中でも、いまだ十分に検討の余地があり、中近世移行期において一貫して重要な宗教勢力であった、天台三門跡の一つである青蓮院門跡を主な検討の対象とした。青蓮院門跡は、中世後期以降、地方寺院と本末関係など様々な関係を有したことが諸史料から確認され、宗教的都鄙関係の

成立する時期・原因・その内実・変遷過程を検討するうえで適切である。使用する史料については、『華頂要略』や後述する『千妙寺列祖伝』など、後世に作成されたものも、その性格を検討した上で積極的に使用した。

第一章

本章では、中近世移行期の青蓮院門主とその坊官（門主に仕えた在家の僧）の発給文書を収集・分析し、宗教的都鄙関係の変遷とその背景を考察することを目的とした。まず、先行研究にもとづきながら、中世後期には、それまで門跡機構の意思決定権を十分に有していた院家の多くが退転したこと、（門主―坊官）の意思決定権が拡張したと推定した。そのため、上記の検討により、青蓮院門跡の宗教的都鄙関係の変遷やその背景についても考察することが可能となる。

収集した文書の分析を行った結果、以下の通りに、門主ごとの都鄙関係の特質を明らかにした。室町後期の尊応法親王期には、①門跡領知行関係文書②比叡山山坊・畿内末寺住持補任関係文書③諸職補任関係文書に大別され、都鄙関係の史料が見出だせない。戦国期の尊鎮法親王期には、地方の有力寺院との関係性が見出されるようになる。出羽国立石寺、若狭国羽賀寺、常陸国吉田薬王院などがそれである。これらの寺院は、守護大名やその被官といった寺院の外護者が没落したことで、荒廃や焼失などに遭った。そうした状況下で、地方寺院・中央寺院である青蓮院門跡双方の働きかけにより都鄙関係が結ばれるようになった。青蓮院門主不在期に政務を代行した寛恕は、尊鎮以来の都鄙関係を継続したと評価される。織豊期の尊朝法親王期は、若狭国羽賀寺の寺領回復運動に際して積極的に朝廷への働きかけを行うなど、従来関係のあった地方寺院と、より深い関係を有した。また尊朝期には、遠江国蓮華寺や筑後国坂東寺など元々延暦寺末寺で

あつた寺院と関係を有するようになる。これは、比叡山焼き討ちに伴い機能不全となつた山門機構の代行を青蓮院門跡が請け負つたことによると考へる。このように、尊朝期には、前代より多くの地方寺院との交流を持つようになった。江戸初期の尊純法親王期には、尊朝以来関係を持つ地方寺院との繋がりを保つものの、形骸化が見られる。その背景には近世国家による宗教統制政策があると考ええる。

以上の分析から、中近世移行期における青蓮院門跡の宗教的都鄙関係の特徴は次のようにまとめられる。

- ① 地方寺院再興などに際して勸進状・奉加状作成。
 - ② 僧官など官途贈位に際しての取次。
 - ③ 延暦寺再興期における奉加要請・延暦寺地方末寺との関係。
 - ④ 地方寺院からの訴訟取次。
 - ⑤ 法流などを介した本末統制。
- こうした特徴は、同時期に見られる、聖護院門跡による地方山伏統制や醍醐寺高僧などによる地方への教線拡大と同一の方向性を有するものの、都鄙関係の背景として経済的要素だけではなく、法流保護や延暦寺焼き討ちという要素を持つことなどが他と異なる特徴として指摘される。

第二章

前章において取り上げなかつた、「⑤法流などを介した本末統制」の具体的様相を説明することを目的に、「青蓮院門跡―常陸国千妙寺」を主な題材として検討した。なお、近世中期に成立したと考えられる『千妙寺列祖伝』（早稲田大学図書館所蔵 旧教林文庫蔵）が十分な史料価値を有すると考え、積極的に活用することで、限られた同時代史料を補完し、より精緻な分析を試みた。

千妙寺は、観応二年（一三五一）、亮守が実乗院門跡（青蓮院門跡の院家）より三昧流の灌頂を受け、常陸国黒子の地に開創した寺院である。まず、戦国期以前については、史料的制約があるものの、両者の間に積極的な関係は見られない。一方、戦国期、青蓮院門跡の三昧流が、院家退転に伴い断絶すると、覚恕・尊朝それぞれからの依頼により亮珍・亮信は、上洛し灌頂を実施する。このように法流相承を目的として、深い関係性へと変化したのである。ここで着目したのが、天正十二年に尊朝が發布した「諸国末寺中法度」（以下、「法度」という史料である。この史料は現在、千妙寺・輪王寺、そして『華頂要略』にのみ伝わっている。従来「法度」は、全国に發布されたと考えられていたが、文献学的検討から、千妙寺を中心とする地域に対して發布されたものと推測した。これは、亮信が比叡山出身の高僧であり、かねてから青蓮院門主と深い関わりがあつただけでなく、亮信が入寺した常陸国千妙寺周辺の宗教状況と「法度」の内容が対応していることによる。以上から「法度」は、亮信という高僧の入寺と京都における三昧流の断絶という状況から生まれた、法流保護を目的とするものであり、千妙寺と宗光寺の間で争われた本末相論においても傍証が可能である。また、戦国期以降、東国で頻出する法流を巡る相論の事例、そして近世初期の寺院法度を取り上げた。ここでは本寺・末寺ともに相補的に果たすべき義務を持つ「契約的」本末関係ではなく、法流などの宗教的紐帯を基にした本末関係への移行が見られることを指摘した。これは、「契約的」本末関係の前提となる荘園制の崩壊と、戦国期以降の地方への教線拡大の動きが背景にあると考ええる。中近世移行期における本末関係は、中世的な契約的本末関係、そして近世的な法流などを紐帯とする本末関係が混じり合っていると考えた。

第三章

本章では、東国に数多く分布した天台系談義所を取り上げ、宗教的都鄙関係活性化の画期を探ることを目的とした。従来、「中央―東国」をめぐる宗教的都鄙関係は、認識レベルにおいて、室町期までは繋がりを保持していたものの、戦国期に断絶していたと考えられていた。そこで、宗教的都鄙関係が、織豊期へ至りどのように変化していくのかを、実態レベルで考察することを目的とした。また、東国にとどまらず列島に広がる学問交流という側面が強調されてきた談義所であるが、そうした認識についても検討を加えた。まず、東国の天台中核寺院であり、有力な談義所の中で、住持の経歴が明らかとなる千妙寺と月山寺の住持の経歴を検討した。その結果、千妙寺や月山寺といった中核寺院の住持でさえ、主に東国内の談義所での修学を経た後にそれぞれの寺院の住持に就いていること、一方で、織豊期に千妙寺・月山寺にそれぞれ入寺した比叡山高僧亮信・舜慶が異質であることが判明した。

次に、上野国長楽寺住持賢甫義哲の『長楽寺永祿日記』に見られる長楽寺真言院という談義所の院主と門徒の動向を検討した。その検討から、真言院主だけでなく、真言院の門徒も談義所間で交流を行っており、特に近郊に位置する金鑽大光普照寺などの寺院との交流が極めて盛んであることを指摘した。学僧とともに移動する聖教の往来についても検討を加え、課題を残しながらも、聖教移動も東国内にとどまり、ある程度移動の型があるのではないかと推測した。

このように「限定的」でもあった、東国の天台系談義所ネットワークが広がりを見せる要因として、元龜二年比叡山焼き討ちのインパクトがあった。比叡山焼き討ち後、武田信玄は自身の許に逃れて来た一部の高僧と東国天台系談義所の学僧三百人を招集し、大規模な講論を催した。この講論

は、中世天台の〔中央寺院―東国寺院〕の宗教的都鄙関係の画期に位置づけられると考える。講論に参加していた延暦寺の高僧亮信などは、この後、東国の天台宗中核寺院千妙寺に入寺し、東国に大きな影響力を持つようになる。特に、亮信は三昧流保護を目的とした相論を起こすなど様々な活動が見られる。そして、青蓮院門跡が東国と強い関係性を有した背景にも、講論を契機に結ばれた関係性と綿密な談義所間ネットワークがあったと推測した。

終章

以上の三章にわたる検討から、中近世移行期の青蓮院門跡における宗教的都鄙関係の特質として、戦国期以降の地方寺院の荒廃に対する中央寺院・地方寺院双方寺院の積極的な関わり、経済的状況のみに収斂しない都鄙関係の活発化などが指摘できる。その契機は、戦国大名武田氏による宗教政策であった講論を通じて、〔中央―東国〕間の宗教的都鄙関係が活発化し、同時にまた、東国を中心に法流を介した本末関係を結んだことにあった。従来、中央寺院と東国の談義所の関係は主に教学面において注目されてきたが、宗教勢力として「天台宗」を捉えるようとする時、談義所間ネットワークも宗教的都鄙関係の中で重要な位置を占めることを明らかにした。また、本修士論文では、比較的長い時間軸を設定して検討したため、より精緻な実証が求められる他、教理など宗教学の知見を十分に活かすことが叶わなかった。今後の課題としたい。